



TITLE:

漢字と情報 No.16

AUTHOR(S):

CITATION:

漢字と情報 No.16. 漢字と情報 2008, 16: 1-8

ISSUE DATE:

2008-03-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/71793>

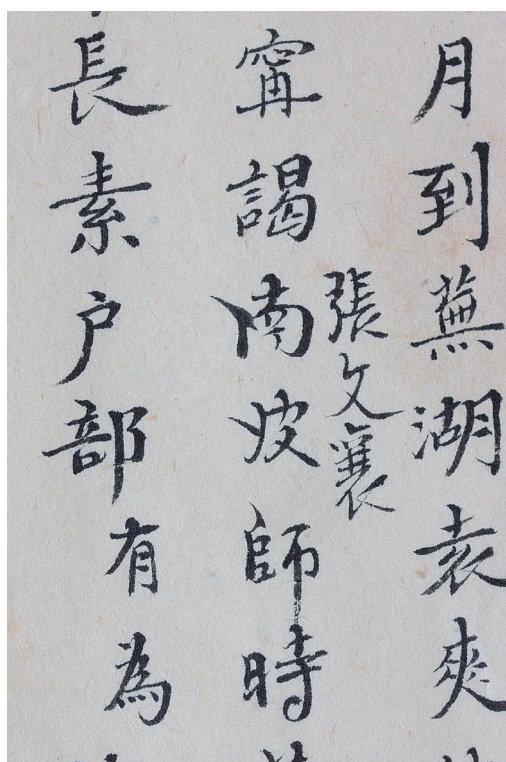
RIGHT:

漢字と情報

No. 16
2008・3



京都大学人文科学研究所 Documentation and Information Center for Chinese Studies (DICCS)
附属漢字情報研究センター Institute for Research in Humanities, Kyoto University



- 「民族」の境界
——シヨオ族と漢族客家人——
- 人文研のアーカイブス(16)『藝風老人年譜』

「民族」の境界

——ショオ族と漢族客家人——

中西 裕樹

「あなたは大和民族ですね」——中国で答えにとまどった質問のひとつである。周知のとおり、中華人民共和国は多数民族である漢族と55の少数民族、計56の民族を公的に認めている多民族国家である。マスコミが民族に関する話題を取り上げることも多い。私が日本国籍を持っていることは間違いないが、この時まで自分が何という民族に属しているかなどとは考えたこともなかった。もちろんこれは多数者の驕りであって、同じ日本国籍でも、例えばアイヌの人々は、「和人」に対する「アイヌ」としての自分を意識せざるを得ないことが多いに違いない。同時に、アイヌに日常的に接することの多い和人は、自らを「和人」と言語化するかはともかくとして、アイヌと違う何者かであるという認識はもつことになるだろう。このように、学問的な定義は別として、民族とは他者が身近にあってはじめて成り立つ相対的な概念で、かつ少数者の方が意識しやすいといえることができる。中国の漢族も、雲南など少数民族が多い地域以外の人々は、日常的に自分が「漢族」なのだ実感することはほとんどないに違いない。政府が公式に定め、身分証に書いてあるからこそその自己意識だと言えるだろう。

漢族の人々の自己認識は、むしろ「北京人」や「四川人」などのように先祖代々の土地、あるいは自分が生まれ育った地域に帰するものが普通である。そして、この地域性自己認識は、相手によって「南方人」（北方人に対して）、「広東人」（広東以外の人に対して）、「海豊人」（広東の他の地域の人に対して）、「公平人」（海豊の他の地域の人に対して）などとその大きさが変化する。これは日本の多数者の自己認識とも共通するところがあり、究極的には使用言語・方言の微細な「訛

り」にまで行き着くことが多い。

ところが、このような地域性自己認識に加えて、地域を越えた同族意識をもつ集団が、漢族内部には存在する。東洋のユダヤ人と呼ばれることもある「客家」である。客家は、広東・福建・江西の省境地域を中心に広西・台湾・四川などにも居住しており、東晋以降に中原から南方に移住してきた漢族の後裔だという強烈な自己意識を持っている。最近の研究では、彼らは必ずしも中原から来た漢族の末裔とは限らず、現居住地に近いところからの移住者も相当数おり、また当然先住民との通婚もあった、と考えられている。客家人はニューカマーであったために「よそ者（＝客家）」と差別をされたが、祖先が中華世界の中心からやってきたと信じることで、先住者より「正統」な中国文化を受け継ぐ者であるという矜持を持つことができたのである。このような祖先伝承を大切にする客家の自己認識では、客家語を紐帯とした客家人意識が「広東人」、「福建人」などといった地域性自己認識に優先するのが大きな特徴で、「むしろ祖宗の田を売れども、祖宗の言を売るなかれ」という戒めが存在するほどである。

客家というエスニックグループの形成にかんして、キーポイントとなるのがミャオ・ヤオ系の少数民族であるショオ族である。ショオ族は、やはり広東・福建・浙江・江西・安徽各省の山がちな地域に居住しており、現在の人口は約七十万人。姓の数が少なく、盤・藍・雷・鍾という四姓とその派生形でほとんどのショオ族をカバーする。客



(写真1)

家同様、移住を繰り返してきた人々で、湖南省から広東・福建・江西の省境地域を経て、現在の居住地に移住していったという説が有力である。ショオ族のうち、広東の海豊県・恵東県・博羅県・増城市に住む約千五百人のみは、ミャオ・ヤオ系のショオ語を保持しているが（客家語とのバイリンガル）、残りはみな客家語によく似た言語を使うようになっている。ショオ族は高度に「漢化」しており、風俗・習慣も周囲の漢族とほとんど変わらない。漢族との通婚も進んでおり、母親が客家人という家庭も少なくない。このため、中華人民共和国成立直後に行われた「民族識別」において、彼らはまず第一に漢族か否かという判断の対象となった。ここでいう「漢族」が客家であることは言うまでもない。結局、1956年にショオ族はひとつの少数民族として認定されたが、その基準とされた言語・自称・伝説・祭祀などは、すべてのショオ族が共通して保持している訳ではなく、ショオ族が客家人かの判定には曖昧な部分があったと言えるだろう。比較的はっきりとしたエスニシティーをもつ人々がいる一方で、マージナルな集団も存在していたという訳である。

その証拠のひとつとして、改革開放政策開始後に各地の「客家人」から提出されたショオ族への族籍変更要求がある。ここでは、その中でも規模の大きかった河源市の例を取り上げよう。河源市は客家の中心地である広東省東北部に位置し、シ

ョオ族が族籍恢復するまではほぼ全ての住民が客家であった。1987年に域内の藍姓住民からショオ族籍の恢復要求が出され、翌年には広東省民族事務委員会が調査に入った。彼らが保存していた祖図・族譜などにより、89年に政府の批准を受け、河源の藍姓住民はすべてショオ族に族籍を変更した。その後、1999年7月には、河源市内で最もショオ族が集中している東源県に漳溪ショオ族自治郷が誕生している。河源のショオ族人口は約八千人、87年まで客家人と自称してきたことについて質問すると、少数民族であると知れるとさまざまな不利益を被る可能性があるので族籍を隠してきたのだという説明がされる。しかし、数千人もの人間が自らのエスニシティーをずっと隠し続けていられるだろうか。少なくとも外から見える風俗・習慣・言語などが客家化していた証拠だと言えるだろう。改革開放路線や少数民族への優遇政策がなければ、彼らは族籍恢復要求を出すことなく、そのまま永遠に客家に同化してしまったかも知れない。

もう一つショオ族の客家化の事例を挙げよう。私がここ数年調査をしている海豊県鵞埠鎮紅羅村のショオ族は、ほとんどの村民が藍という姓をもつ。この藍姓の人々は、写真1のように藍氏祖祠という祖先崇拜施設を所有している。中国の建築らしく対聯が貼られているが、その文句は「汝南世澤長、蒲群家聲遠」と決まっているそうである。ここに出てくる「汝南」は、客家の原住地とされる河南省の地名であり、ショオ族が客家の中原伝承を取り入れた名残に違いない。興味深いことに、これとほぼ同じ対聯を持った藍姓の人々が、香港新界の沙田にいたのである。写真2は、その沙田排頭村の藍氏家祠である。こちらの対聯は「汝南世澤、鐵笛家聲」で、海豊のものと比べると「長」や「遠」という述語がないものの、その他は「蒲群」と「鐵笛」が入れ替わっただけである。これはとても偶然の一致とは思えない。沙田の藍さんにインタビューしたところ、彼らはもともと河源市龍川県から来た客家だということだった



(写真2)

(現在は広東語を話している)。この龍川は、族籍
恢復したショオ族が集中している東源県のまさに
隣に位置しており、現在も少数ながらショオ族が
居住している。そして、河源の藍姓ショオ族の族
譜に書かれている彼らの父祖の地は、まさに河南
汝南なのである。上述のように「藍」という姓は
ショオ族の四大姓のひとつである。もちろん、藍
姓をもつ漢族もいるが、対聯の文句やかつての居
住地と併せ考えると、ショオ族の客家化というシ
ナリオがぴったり当てはまりそうな塩梅である。

以上、ショオ族と漢族客家人を例に「民族」の
境界について見てきたが、ここからわかることが
二つある。ひとつは、人類の自己認識が非常に動
態的なものだということ。もうひとつは、民族と
いう概念がしばしばその時々^の政治状況に左右さ
れるもので、同時にどの民族に属するかを決める
のはひとりひとりの人間ではなく国家だというこ
とである。

冒頭の質問に戻ろう。民族が政治的なものであ
る以上、私には自分の所属民族を決めることがで
きない。同時に、民族にはアイデンティティを感じ
ない。結局、曖昧に微笑みながら「わかりませ
ん」と答えるしかなさそうである。

(人文科学研究所助教)

謝辞：筆者が以前に撮った沙田藍氏家祠の写真は
モノクロであったため、本稿執筆にあたって香港
在住の郭必之さんに新たに撮影していただいた。
心より感謝申し上げます。

人文研のアーカイブス (16)

『藝風老人年譜』

清 繆荃孫 撰
鈔本

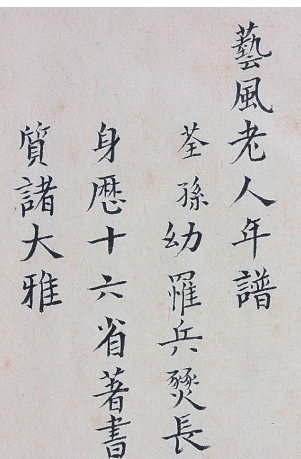
古勝隆一

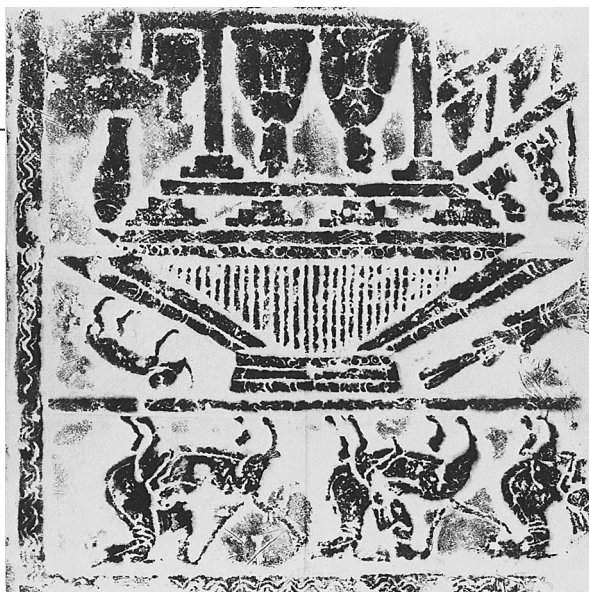
本書は藝風老人、すなわち繆荃孫^{びょうせんそん} (1844-
1919) の自訂年譜である。民国時代初年の精鈔本、
一冊。

■本書から見る繆氏の生涯

繆荃孫、字は炎之、またの字は筱珊、晩年には
藝風と号した。清末から中華民国初期にかけての
学者・教育者であり、目録・金石学の大家として
知られる。江蘇省江陰の人。江陰の繆氏は代々科
挙官僚を出した家系で、十一歳にして五経を習得
するなど、早熟な少年であった繆荃孫は、一族の
期待を受けて成長した。咸豐十年 (1860)、彼が
十七歳の時、太平天国の乱が江陰にまで及び、そ
の影響で継母を連れて故郷を離れ、淮安・長沙の
各地を転々として、
同治三年 (1864)、
四川にたどり着いた。

その後、繆荃孫は
しばらく成都に腰を
落ち着けて、数名の
師友を得て勉学に励
み、同治六年、二十
四歳の時に挙人とな
った。その後、数回
にわたり上京して会
試を受けているが、



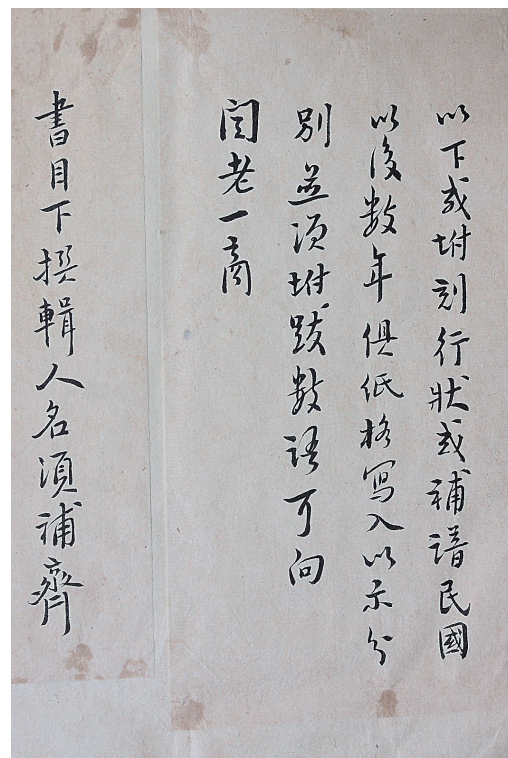


いずれも落第し四川に戻った。光緒元年（1875）、三十二歳の時、張之洞（1837-1909）が学政として四川にやってきたので、「張孝達先生の門下に贅を執りて業を受く」ということになり、かの有名な『書目答問』の撰述を命じられたという。

翌光緒二年、ようやく念願の進士となり、翰林院庶吉士に任ぜられ、さらに翌年、翰林院編修となった。それ以来、多数の書物の校定・編纂作業に従事し、光緒九年に国史館纂修、翌十年に同総纂となって「国史」、すなわち清代史の編纂に当たった。

光緒十四年（1888）、繆氏が四十五歳の時、ある事件が起こった。この年の五月、繆氏は国史のうち、儒林伝・文苑伝・循良伝・交友伝・隱逸伝の五伝の原稿を完成させた。その内容につき、総裁の徐桐（1819-1900）と繆氏との間に不和が生じたのである。八月、繆氏は継母を弔うという名目のもと、北京を離れて故郷に戻る。その後しばらく、江蘇の南菁書院の院長を勤めたり、広州の広雅書局で働いたりした。光緒十七年、父が亡くなり、同十九年にその喪が明けると、繆氏は官界に復帰したが、同二十年、またも徐桐といさかいをおこし、「始めて浩然として帰志有り」（『年譜』の語）、官を棄てて帰郷してしまう。

その後、繆荃孫は中国各地の重要な書院・学堂・図書館の責任者を務め、またもう一つの繆氏の仕事であった出版業においても活躍した。北京とは一線を画してはいたものの、高等学堂の設立



本書の末に貼られた小紙片

準備のため、光緒二十八年（1902）には視察のため来日し、帰国後、三江師範学堂（後の南京大学）の「総稽差」なる責任者に就任し、その草創期を支えた。その後、光緒三十三年、六十四歳の時には学堂を去り、江南図書館（後の南京図書館）の総弁に就任し、その設立に尽力し、また宣統元年（1909）には京師図書館（後の北京図書館、中国国家図書館）の正監督になった。

そして宣統三年（1911）、繆氏六十八歳の時、清国が滅亡する。『年譜』は次のように語る、「十二月二十七日、皇帝は位を民国に遜り、南北合同し、国破れ家亡び、生くること死するに如かず」。繆氏はその後も上海に居を移して活動が続けるが、彼自身の手になる自訂年譜の記事は、この年をもって終わっているのである。

■『藝風老人年譜』の通行本と本所蔵本

『藝風老人年譜』の通行本は、民国二十五年（1936）の文禄堂刊本である。本所にはこの刊本

を蔵していないが、「北京図書館蔵珍本年譜叢刊」（第一八〇冊）や『藝風老人日記』（北京大学出版社）の附録など、さまざまなかたちで影印されており、簡便に参照することができる。

本所に蔵する抄本と通行本とを比較した際、両者のもっとも大きな違いは、本所蔵本が宣統三年（1911）の記事を最後にするのに対し、通行本にはその後の繆荃孫の経歴が子息、繆禄保・僧保の手により補われ、また夏孫桐「繆藝風先生行状」が附されていることにある。

本所蔵本にのみ見えるもう一つの特徴は、この本の末に次のような小紙片が貼附されていることである。「以下或いは行状を増刻し、或いは譜の民国以後の数年を補い、俱に低格して写入し、以って分別を示し、並びに須らく跋数語を増すべし。閩老に向いて一商すべし」「書目の下の撰輯人名は、須らく補齊すべし」。

この小紙片に記された内容は、いずれも年譜の重修に関わるものである。「民国以後の数年」とは、民国元年から繆氏が亡くなった民国八年の八年間を指すに違いない。また「行状」について言及がある以上、繆荃孫の死後、その「行状」が夏孫桐（1857-1941）によって執筆された後にこの小紙片が書かれたことに疑いはない。文中に「閩老」と呼ばれる人物こそが夏孫桐であり、彼と相談の上、繆荃孫年譜の重修が行われたことが分かるのである。

夏孫桐は、繆荃孫と同郷、江陰の人。字は閩枝・悔生など、晩号は閩庵・悔龕。光緒十八年の進士である。繆荃孫は光緒九年五月に妻の莊氏を亡くしたが、同年、夏氏、すなわち夏孫桐の妹と再婚した。これらもすべてこの年譜から確認できる事柄である。

この小紙片には署名が見えぬのであるが、以上のような関係を念頭に置き、小紙片を書いた人物を推測すると、繆荃孫の子息、とりわけ「民国以後の数年」を年譜に補った繆禄保・僧保の兄弟が思い浮かぶ。彼らは年譜を重修し、民国二十五年に文禄堂刊本として出版した。そして彼らが手も

とに置いた繆荃孫の自訂年譜こそが、本所蔵本であると考えられるのである。そうであるとするならば、繆家に伝えられた繆荃孫年譜としては、知られるかぎりもっとも著者自筆本（その本の現存は確認されていない）に近い本である、ということにもなる。

通行本には、小紙片の指示どおり、「民国以後の数年」の記事と「行状」とが補われている。ただ細かいことをいうならば、「俱に低格して写入し、以って分別を示す」ことが実行されているのは「民国以後の数年」についてのみであり、夏孫桐「行状」の方は、格を下げないが、それは明らかに本文と紛れないものと判断されたためであろう。

なお、「書目の下の撰輯人名は、須らく補齊すべし」という小紙片の記述は、繆氏が年譜中に自己の刊行した書物を載せているが、その書物の撰者表記が不統一であるので、それらの記述を統一すべし、ということであり、確かに通行本ではそのような整理がなされている。

■張之洞との関係をめぐって

初学者の格好の手引きとされる張之洞の『書目答問』、この書物は張氏によって書かれたものなのか、それとも繆荃孫によって書かれたものなのか。長く学界の興味をひいている問題である。

繆氏執筆説の根拠は、何よりもこの年譜の光緒元年の条に「八月、張孝達先生の門下に贅を執りて業を受け、命じて『書目答問』四巻を撰せしむ」ということである。この年譜が刊行されて以降、『書目答問』が張之洞のために繆氏を書いた著作であるという論調が強くなった。

その後、陳垣が「藝風年譜与書目答問」という論文を書き、この問題を論じた。陳氏は、光緒三十四年に繆荃孫が「同治甲戌、南皮師 四川の学を相督し、諸生来たりて問う、応に何れの書を読むべきや、書は何れを以て善しすべきや、と。蜀士に嘉恵する所以を謀り、是に於いて、『書目答問』の編有り。荃孫、時に吳勤恵公の督署に館し、

随いて共に助理す」(「半巖厂所見書目序」)といったのを引き、繆荃孫が一方では「撰」といい、もう一方では「助理」といつているのを指摘し、「助理と代撰とは、本より同じからざる有り、(「半巖厂所見書目序」の)この語、張之洞未だ卒せざるの前に在り、較や信拠すべし」といつて代撰説を否定した。陳氏が挙げたその他の証拠からいつても、繆氏執筆説は信じがたい。

張之洞、字は孝達、号は香濤、直隸南皮の人。湖北・四川の学政、そして両広総督・湖広総督・両江総督、大学士、軍機大臣を歴任した。清末における洋務派の政治家として知られ、産業・教育・軍備の近代化を実行し、「武備・文事、並びに挙ぐ」と評された(『清史稿』本伝)。諡は文襄。張之洞は繆氏にとっての恩人であり、官界における失意の日々にあった繆氏を各地の学校や図書館に紹介したのも、ほとんど張氏であった。両者の関係は終始良好で、宣統元年(1909)に張氏が亡くなった際にも、その訃報を受け、「一たび働して病み、兩月にして方めて癒ゆ」と『年譜』にもある。

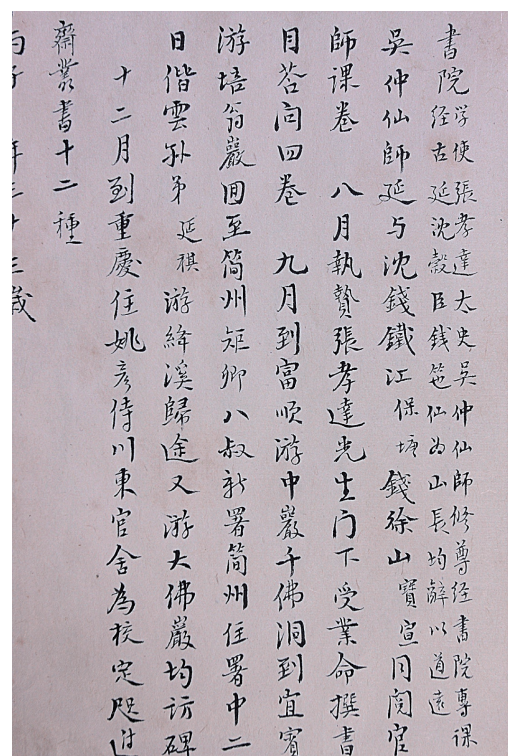
果たして張氏と繆氏との間に感情的な葛藤があったのかどうか。邪推はやめておきたい。ただ、本所蔵本の『藝風老人年譜』において、張之洞の名前がさまざまに表記されている事実を指摘しておき、読者の参考に供したい。

(一) 光緒元年の記事では、「張孝達先生」と字で呼ぶ。

(二) 光緒十四年の記事では、もと「南皮師」と張氏の出身地で呼ぶが、これを「張文襄師」と諡で呼ぶのに改めている(表紙画像参照)。この例が多い。

(三) 宣統元年の記事(張之洞が亡くなったことに関する記事)では、「張文襄公」としている。

このうち、「南皮師」が「張文襄師」と改められたことは何を意味するのか。改めたのは繆荃孫自身なのか、或いは子孫なのか。通行本では「南皮師」の呼び名をまったく用いていないため、そ



光緒元年八月『書目答問』撰述を「命ぜられた」とする記事

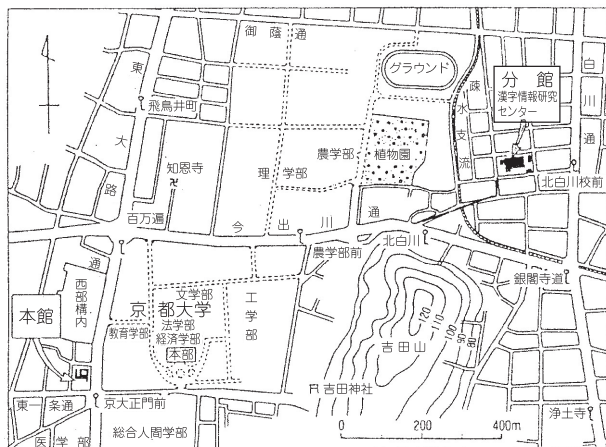
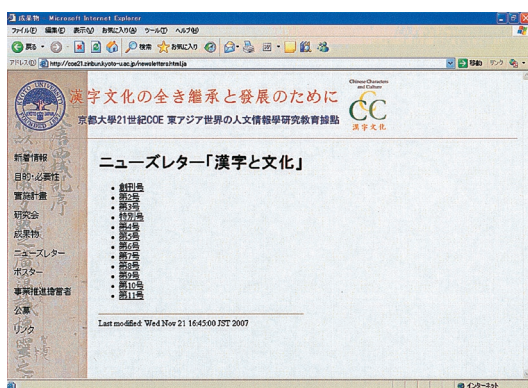
のような疑問がわく余地もないが、本所蔵本を見ると、気にならずにはおれない。これは単に『年譜』が張之洞の存命中にすでに書かれはじめていたことを示すだけなのかも知れない。しかしそうであるとする、例の『書目答問』の記事につき、張氏の生前から繆荃孫は『書目答問』の自撰を主張していたことになりはしないか。『年譜』成立にまつわり、さまざまな疑問がのこるが、これにつき諸賢のご教示をまちたい。

なお、本所蔵本には複数の影印本がある。「中国歴代名人年譜彙編」第一輯(王民信輯、台北広文書局)、「近代中国史料叢刊」第五十一輯(沈雲龍輯、台北文海出版社)に収めるものなど。本所蔵本を用いたことを特にことわって影印しているわけではないけれども、そのことは一目瞭然である。(人文科学研究所准教授)

HP・TOPICS

21世紀 COE プログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」には、「漢字と情報」の姉妹版というべきニューズレター、すなわち「漢字と文化」がある。これまでに12号（特別号を含む）が刊行され、PDF版でも公開している（<http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/newsletters.html>）。

COE 事業で推進する研究成果報告、イベント紹介に加えて、中国、台湾、モスクワ、バルセルナ、ドイツ、マラッカなど世界各国に出かけた調査レポートが多数掲載されていて、読み応えのある内容になっている。表紙やカットに、人文研の建物、閲覧室のシャンデリア、書庫の風景写真、貴重書、拓本の書影などがふんだんに挿入されており、編集長である稲葉稔准教授の粋なセンスがキラリと光っている。休刊してしまうのは、実に惜しい気がする。



[DICCS NEWS]

・第42回全国文献・情報センター長会議が2008年1月25日（金）に一橋大学佐野書院にて行われた。文部科学省情報課学術基盤整備室から膝館俊広情報研究推進専門官の参加があった。議題としては、四センターを中心とする今後の組織的なあり方を討議し、現在個別に開催している全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナーを再び合同で開催することに決定した。次年度の当番校は本センターが担当することになっている。なお、本年度のセミナーである「東洋学へのコンピュータ利用第19回研究セミナー」は、2008年3月21日（金）に行う予定である。

・全国漢籍データベース協議会第8回総会を下記のプログラムで行った。

日時：2008年3月6日（木）14時～16時

会場：学術総合センター12階1208・1210会議室

演題：

今年度の事業報告 井波陵一（センター教授）
日本における宋版との出会い

陳捷（国文学研究資料館准教授）
巻頭画像撮影について

武部真子（一橋大学附属図書館学術情報課）
平成19年度の全国漢籍データベース概況

安岡孝一（センター准教授）

・最新のセンター刊行物

『京大人文研蔵書印譜（一）』（東方学資料叢刊第16冊，井波陵一編，2008年2月）

『漢籍はおもしろい』（京大人文研漢籍セミナー1，2008年3月）

発行日 2008年3月10日

発行所 京都大学人文科学研究所附属
漢字情報研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47

電話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

<http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>